

<b>Title</b>	ミャンマー・カレン族難民におけるキリスト教（1）
<b>Author(s)</b>	宮本, 悟
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.21-No.3 : 24-26
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3525">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3525</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## ミャンマー・カレン族難民におけるキリスト教(1)

宮本 悟

筆者は2011年9月13日（火）から9月15日（木）までミャンマー（旧ビルマ）との国境にあるタイの町メーソットに滞在し、難民としてメーソットとその周辺に住んでいるカレン族の状況を調査した。メーソットに在住し、カレン族を長年支援してきた友人の東輝信氏が筆者を案内し、多くの説明を与えてくれた。カレン族の状況や歴史の知見は、東輝信氏の豊富な知識と経験によって得たところが大きい。それに、筆者が著書や論文などから得た知見を加えて、キリスト教を中心にして、カレン族難民の状況や歴史を簡略に報告したい。

ミャンマーは1948年に英国から独立したが、その直後から現在に至るまで政府と少数民族の戦闘が続いている。その少数民族の中心的な存在となっているのが、ミャンマーの少数民族で最も大きな勢力を持つカレン族である。ただし、約60年間、戦闘を続けてきたカレン族はすでにタイとの国境にいくつかの拠点を持っている程度にまで勢力が衰え、数多くの難民を出す状態になっている。

難民の行き先の多くがタイの難民キャンプである。その難民キャンプを筆者が見学したのは、9月14日（水）である。東輝信氏が筆者を案内してくれた。この難民キャンプはメーラ・キャンプと呼ばれ、おそらく数ある難民キャンプで最もよく知られている。難民の数は3～5万人ほどで、見た目には巨大な山村であるが、その周りは鉄条網で囲まれており、監視のための兵士も配置されている。メーラ・キャンプの住人の大部分がカレン族である。仏教国のイメージが強いミャンマーであるが、カレン族にはキリスト教徒が比較的多く、難民キャンプには教会もあり、教育施設としても使われていた。東輝信氏によると、英語教育も盛んとのことである。メーソットには、日本人や韓国のキリスト教団によって設立されたというカレン族のための学校もあった。

さて、カレン族にキリスト教徒が多い理由は、



メーラ・キャンプにあった教会。

英国統治下のビルマであった時代にまでさかのぼる。現在は多くの難民を海外に出しているカレン族であるが、英国植民地の時代には多数を占めるビルマ族に比べて、カレン族が優遇されていた。アジア経済研究所の研究員である中西嘉宏の著作によると、英国ビルマ州全人口の65.7%をビルマ族が占めていたにもかかわらず、1941年年4月30日の時点における英国ビルマ軍および国境防衛軍27,981名のうち、ビルマ族は3,742名（13.4%）にすぎなかった。それに対して、カレン族は4,782名（17.1%）であった。英国ビルマ正規軍9,877名に的を絞れば、ビルマ族は1,893名（19.2%）であり、カレン族は2,797名（28.3%）である。カレン族がいかに優遇されていたかが分かる。これは、英国領インド帝国で行われていた少数民族によって多数民族を統治する「分割統治」による影響と考えられている。

英国植民地時代に多くのカレン族がキリスト教に改宗していった。カレン族の最初の改宗者は、バプテリスト派の米国人宣教師であるジャドソンから教えを受けたコー・タービューであり、1828年のことであった。これは第一次イギリス・ビルマ戦争によって、ビルマが敗北した2年後のことであり、英国によるビルマ植民地化の第一歩が踏み出された頃であった（1886年に全ビルマが英国統治下に入る）。コー・タービューはカレン族の

伝承にある「失われた本」が聖書であるとして、カレン族でのキリスト教の布教に努めた。また、1832年にバプティスト派の米国人宣教師ウェイドがカレン文字（スゴー文字）を考案したことは、ビルマ語を使わずに、カレン語によってカレン族にキリスト教を布教させる大きな力となった。

ビルマ族によって構成されたビルマ独立義勇軍と共に日本軍が1942年にビルマ全土を占領すると、カレン族は連合国軍として日本軍と戦ったとされている。英国植民地下で優遇されてきたカレン族は、英国の手先と認識されてビルマ族に憎まれることもあり、日本占領下ではビルマ族とカレン族の武力衝突も数多く起こった。終戦前に連合国軍側に寝返って独立活動の主体となったビルマ族ではあったが、カレン族はビルマ族とは異なる独立国を目指していた。1948年1月4日のビルマ独立後には様々な反政府組織の蜂起が相次ぎ、1949年1月31日にはカレン族の政治組織であるカレン民族同盟（KNU = Karen National Union）傘下のカレン民族防衛機構（KNDO = Karen National Defense Organization）もラングーン郊外のインセインでビルマ政府との全面衝突に入った。以降、KNUとその軍事組織であるカレン民族解放軍（KNLA = Karen National Liberation Army：KNDOの後身）は、衰退の一途を辿ってはいるが、現在でもミャンマー政府と戦闘を続けている。

このKNUの指導層にはキリスト教徒が多いことが知られている。KNLAで兵士として戦い1997年に死亡した西山孝純も、著書の中でそう記している。フリー・フォトジャーナリストでカレン族の取材をしてきた山本宗輔も、KNUの中央執行委員35名の大半はキリスト教徒で、仏教徒は4名のみであったと著書に記している。しかし、カレン族全体的では、やはり仏教徒が最も多いようである。マーティン・スミスによると、カレン族の大多数は現在でも仏教徒であるという。山本宗輔によると、人口10万人のKNUパブン管区（ミャンマーのカレン州北部）での宗教分布はキリスト教徒が4

割であって、アニミストが3.5割、仏教徒が2.5割である。キリスト教徒のうち、プロテスタントとカトリックの比率は5対3という。ただし、パブン管区はキリスト教徒の比率が多い方であり、その南部にあるKNUドゥープラヤ管区では9割が仏教徒という。地域毎に格差は大きいようであるが、KNUの指導層にはキリスト教徒が多く、一般人には仏教徒が多いと理解できると思われる。

西山孝純も山本宗輔も、宗教の違いは一般的なカレン族社会ではほとんど問題になっていないと語っている。しかし、この宗教の違いは、KNUに分裂をもたらすことになった。1994年12月に約200名の仏教徒カレン兵が宗教的な差別を理由に反乱を起こし、民主カレン仏教徒機構（DKBO = Democratic Karen Buddhist Organization）とその軍事組織である民主カレン仏教徒軍（DKBA = Democratic Karen Buddhist Army）を組織して、ミャンマー政府軍と共にKNUを攻撃し始めた。これが要因でKNUの総司令部があるマナプロウが1995年1月31日に陥落し、タイにも大量の難民が押し寄せた。DKBAは、タイにあるカレン族の難民キャンプをも襲撃し始め、カレン族とカレン族が対立する状態になり、現在も続いている。筆者は、東輝信氏に案内されて、DKBAに襲撃されて焼かれた難民キャンプの跡地も訪ねた。そこにはタイ人による幾つかの人家はあったが、すでに野原か農地に変わっていた。



DKBAによって襲撃された難民キャンプの跡地。

## 参考文献

池田一人「ビルマ植民地期末期における仏教徒カレンの歴史叙述－『カイン王統史』と『クゥイン御年代記』の主張と論理－」『東洋文化研究所紀要』第156冊（2009年12月）69-140頁、<<http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/bitstream/2261/32422/1/ioc116005.pdf>>（2011年10月7日アクセス）。

マーティン・スミス著、高橋雄一郎訳「ビルマの少数民族：開発、民主主義、そして人権」（明石書店、1997年）。

中西嘉宏『軍政ビルマの権力構造：ネー・ウィン体制下の国家と軍隊 1962-1988』（京都大学学術出版社、2009年）。

山本宗補『ビルマの大いなる幻影：解放を求めるカレン族とスーチー民主化のゆくえ』（社会評論社、1996年）。

“Karen National Union” <<http://karennationalunion.net/index.php>>（2011年10月7日アクセス）。

（みやもと・さとる 聖学院大学総合研究所准教授）